

Girls in the Isolated Island

早瀬真人

挿絵/ロツコ

美少女たちの 島の離れ

つやめく魅惑の放課後



試し読み版

リアルドリーム文庫

登場人物

Characters

篠田 竜平

(しのだ りゅうへい)

瀬戸内海に浮かぶK島出身の高校一年生。本土にある瀧本高校に通っている。瑞穂、さつき、澪の幼馴染み。スポーツ万能ながら、美術にも優れた才能を発揮する童貞少年。

栗原 瑞穂

(くりはら みずほ)

瀧本高校の一年生で、美術部所属。学力優秀な努力家。セミロングの髪にぱっちりとした目元が愛くるしい、優しい少女。竜平の幼馴染み。

涼本 さつき

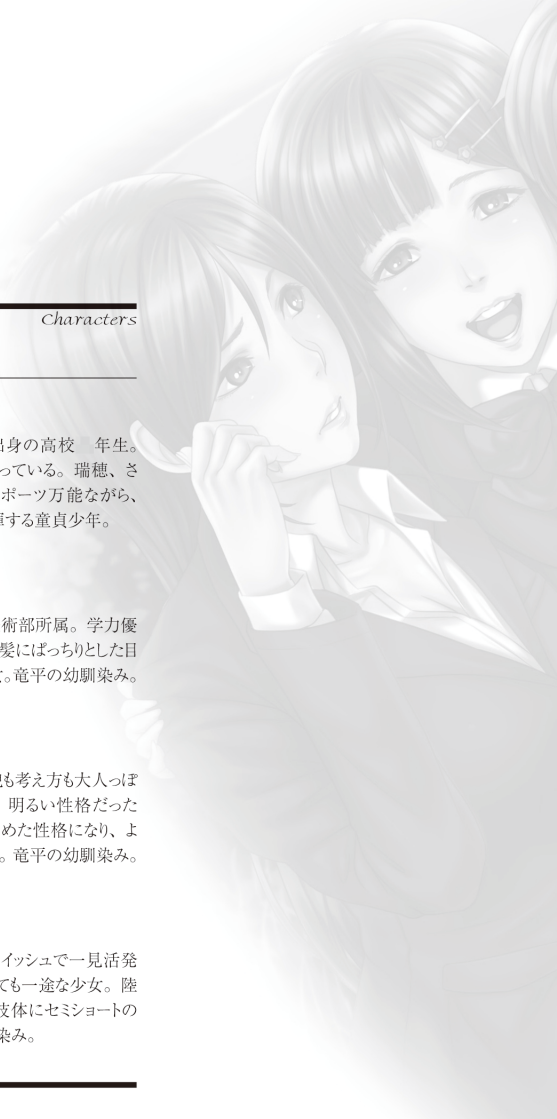
(すずもと さつき)

瀧本高校の一年生。風貌も考え方も大人っぽい一匹狼的な巨乳少女。明るい性格だったが、両親の離婚を機に冷めた性格になり、よからぬ付き合いの噂も立つ。竜平の幼馴染み。

木下 澪

(きのした みお)

瀧本高校の一年生。ボーイッシュで一见活発そうに見えるが、内面はとて一途な少女。陸上部所属で引き締まった肢体にセミショートのが髪が映える。竜平の幼馴染み。



第一章 美少女の淫らな口唇奉仕

1

五年の月日が流れ、竜平は本土にある瀧本^{たきもと}高校に通っていた。

（あーあ、来月から二年生か。なんか……かつたるいな）

何をしようにも気力が湧かず、勉強も手につかない。

放課後、竜平は誰もいない教室のベランダから、陸上部の練習をぼんやりと眺めていた。

ユニフォーム姿の滯が、百メートルダッシュを何本も繰り返している。

まだ三月だというのに、額には汗の粒が浮かび、肌からは湯気がうつすらと立ちのぼっていた。

運動神経の発達した彼女は、走ることがよほど好きなようで、競技大会では好成績を連発しているようだ。

（去年の今頃は、俺もグラウンドを走りまわっていたのに……）

アキレス腱を痛め、サッカー選手の夢を絶たれた竜平は、クラブも辞めてしまい、無気力な生活を送っていた。

今の自分に、澁刺とした滯の姿はあまりにも眩しすぎる。

教室に戻ろうとした刹那、滯は臀裂に食いこんだ。パンツの裾を後ろ手で直した。

（あのユニフォーム……よく見ると、すぐくエッチだよな。まるで、ブルマーみたいにぴっちりしてるし）

ランニングシャツも素肌張りつき、身体の稜線を際立たせている。

竜平は二・〇の視力を駆使し、よこしまな視線を滯の肢体に注いだ。

アスリート体型の肉体は、贅肉がいつさいついていない。

それでも、胸とヒップの膨らみははっきりと確認できる。

足はすらりとしていたが、太腿には適度な脂肪が付き、プディングのようにふると揺れていた。

（よく見ると、女らしい身体つきをしてるんだよな）

ややハイレグぎみのパンツが鼠蹊部に食いこみ、中心部がこんもりと楕円形に盛りあがっている。

胸を騒がせた竜平は、海綿体に大量の血液を集中させていった。

(や、やばい……ムラムラしてきた)

サッカードを退部してから、暇を持てあましているせいか、近頃は堪えきれない性欲に悩まされている。

自慰行為は半ば日常化し、日に一回だけでは収まらず、二度三度と精を放出することも幾度となくあった。

(サッカードをしていたときは、くたくたに疲れて、オナニーどころじゃなかったもん。ああ、やべっ！ 我慢できないかも)

ペニスがパンツの中で変な方向に突っ張り、猛烈な痛みを感じる。

右手で逸物の位置を直したとたん、背後から鈴を転がしたような声が聞こえてきた。「何やってるの？」

「ひっ！」

仰天して振り返れば、瑞穂がベランダの出入り口に佇んでいる。

画材道具を手に見ているところを見ると、どうやら美術部の活動が終わったようだ。泡を食った竜平は、平静を装いながら口を開いた。

「い、いや……滞の奴、がんばってるなあと思ってさ」

「うん、すごいよね。先日の陸上競技大会、百メートル走の高校女子記録に〇・二秒

差まで迫ったんだって。卒業したら、実業団の陸上部に入りたいみたい」

「そ、そうなんだ」

美少女たちに距離感を覚えはじめたのは、中学二年生あたりだろうか。

思春期に入り、互いに異性を意識しだしたことがいちばんの原因なのかもしれない。
(瑞穂とは高校二年でようやく同じクラスになったけど、滯やさつきとは中学からずっと違うクラスだったもんな。二人とはここ二年ほど、話らしい話もしてないや)

将来への目標を失い、宙ぶらりんの状況が不安を駆りたてるのか、胸がチクリと痛んだ。

「小学生のときはいちばん気が弱かったのに、すごいよね」

瑞穂はそう言いながら画材道具を机の上に置き、ベランダに出てくる。そして竜平に寄り添うような体勢で、グラウンドに目を向けた。

「み、瑞穂だって……」

「え？」

「瑞穂だって、すごいじゃん。中学のときから、学年テストはずっとトップでさ。頭がいいってことはわかっていたけど、まさかここまでとは思っていなかったよ」

「そんなこと……」

「もちろん、受験は……するんだろ？」

「うん、東京の大学を受けるつもり」

「そ、そう」

瑞穂や滯は、すでに自分の進路を決めている。

いたたまれなさから唇を噛んだ瞬間、鼻先に甘いシャンプーの香りが漂った。

風になびく艶のある黒髪、澄んだ瞳、愛くるしい小さな鼻、桜桃のような唇。夕日

に照らされた瑞穂の顔は、絶世の美少女っぷりをいかになく見せつけていた。

（な、何でこんなにいい匂いがするんだよね。いちばん女らしく成長したのは、瑞穂

かも……）

横目でうかがえば、制服の胸元は豊かに膨らみ、丸みを帯びたヒップは後方にクン

と突きでている。

いったんは停滞していた性欲が息を吹き返し、海綿体に再び大量の血液がなだれ込

んでいった。

（お、大きくて、柔らかそうなおっぱい。お尻もプリプリしてて……。ああ、見たい、

触りたい。女の子のあそこって、どうなってるんだろ？）

竜平はキスはおろか、異性との交際経験すらない。

透きとおるような肌を見つめているだけで、童貞少年の妄想は無限大に広がった。

（み、瑞穂も誰かとつき合ったという話は聞いたことがないし、きつと、いや、絶対に処女だよな）

幼馴染み、昔のよしみということで、必死に頼みこめば、一発やらせてくれるのではないか。

猛烈な淫情を燃えあがらせたたん、よこしな思いを気取られたのか、瑞穂が突然真剣な眼差しを向けてきた。

「あつ、な、何？」

慌てふためく少年を、美少女はじつと見つめている。

ひよつとして、この女はエスパーか？

腋の下がじつとりと汗ばんだ直後、瑞穂の口から思いがけない言葉が放たれた。

「ねえ、竜平。美術部に入らない？」

「へ？　び、美術部？」

「そう。ほら、小学生のとき、絵や工作がうまかったじゃない。私、竜平の描く絵を見て、すごくびつくりしたんだから」

「絵かあ……」

生まれつき手先が器用なのか、確かに絵や工作は好きだったし、得意科目でもあった。

子供の頃は毎日のように、ノートに絵を描いていた記憶もある。

だがサッカーの魅力に取りつかれてからは、絵に対する興味などまったく消え失せていたのだ。

「今の美術部は部員数も減ってるし、活動日も火曜と金曜の週二回だけだから、そんなに気兼ねすることもないでしょ？」

「うーん、もう何年も描いてないからなあ」

「竜平が入部してくれると、私もうれしんだけどな。ね？」

瑞穂が顔を斜めに傾け、拝むように手を合わせる。

愛くるしい仕草に、竜平は胸をときめかせた。

彼女は昔から他人の気持ちを思いやれる、心根の優しい少女でもあった。

おそらく、落ちこんでいる自分を励ますつもりでの勧誘に違いない。

それがわかっていても、瑞穂の真心を素直に受け入れられないほど、今の竜平の心はすすんでいた。

「キ……キス」

「え？」

「キスしてくれたら……入部してもいいよ」

彼女の性格なら、ひよつとして首を縦に振るかもしれない。

微かな期待に胸躍らせたものの、瑞穂はみるみる眉尻を吊りあげていった。

「本気で……言ってるの？」

「え？ い、いや、も、もちろん冗談だよ。ハハハッ」

すぐさまおどけてみせるも、美少女は少しも笑わず、射貫くような視線を向けてくる。そしてツンとした表情のまま、踵を返して教室に戻っていった。

「あ、み、瑞穂」

怒らせてしまったのか、瑞穂は振り向きもしない。

学生靴と画材道具を手に教室から出ていく美少女の後ろ姿を、竜平はただ呆然と見送るばかりだった。

2

二日後の日曜日、遅い朝食を済ませた竜平は、すぐさま瑞穂の家に向かった。

緩やかな坂道を登る最中、深い溜め息が口からこぼれてしまう。

（やっぱり……あれはまずかったな）

瑞穂は小学生時代、学級委員を六年間務め、みんなのまとめ役に徹していた。

あれから五年も経っているのに、心のどこかで彼女を頼りにし、甘えた気持ちがあったのかもしれない。

「だからって、キスさせろはないよな。せつかく心配してくれてるのに」

独り言を呟きつつ、二階建ての一軒家を仰ぎ見る。

瑞穂の家に来るのは何年ぶりのことだろう。

玄関先に佇んだ竜平は、大きな息をひとつ吐きだした。

（瑞穂、まだ怒ってるかな。な、なんて言おう）

いざとなると決心が鈍り、なかなかインターホンを押せない。

次第に、謝罪よりも照れ臭いという心情が勝りはじめる。

「だ、だめだ……顔を合わせられないよ」

竜平は再び溜め息をつく、と、玄関先からそっと離れた。

子供の頃は何でも気兼ねなく話せたのに、いつから他人行儀な関係になってしまったのか。

（瑞穂が悪いんだよ。かわいくなっちゃうから）

来た道を戻ろうとした刹那、視界の片隅に寂れた神社が入った。

（神社か……懐かしいなあ。小学生のときは、四人でよく遊びにきたっけ）

何の悩みもなく、遊びに熱中していた子供時代が頭の中を駆け巡る。

竜平は無意識のうちに、神社に向かって歩を進めた。

人っ子一人いない境内を突き進み、裏手に回ると、虫取りやかくれんぼをした雑木林が見えてくる。

気持ちが自然と和らいだ瞬間、竜平は足をピタリと止めた。

白い煙とタバコの匂いが、裏手のほうから漂ってくる。

（だ、誰がいる!!）

本堂の壁から顔を覗かせると、ジャンパーにデニムスカート姿の少女が、木の階段に一人で座っていた。

（さ……さつきだ）

この五年間で、いちばんの変化を見せたのはさつきだろうか。

彼女の両親が離婚し、母親が島を出ていったという話を聞いたのは、竜平が中学二年のときだった。

漁師をしている父親と二人暮らしをするようになってから、さつきは笑顔を見せなくなり、いつも一人でいるところを見かけるようになった。

もともと大人びた性格だけに、同級生たちにとっては近寄りがたい雰囲気があったのかもしれない。

まさに一匹狼という感じで、自らすべてを拒否しているようにも思えた。

さつきに関して耳に入ってくる情報といえば、素行の悪い男子生徒とつき合っているとか、援助交際をしているとか、ろくでもない噂ばかりだった。

タバコを吸いながら空をぼんやりと見つめている彼女は、いかにも無気力、無感動、無関心という表現がぴったりのオーラを漂わせている。

（さつきも……いろいろな悩みがあるんだろうな）

竜平自身、満ち足りない毎日を過ごしているだけに、孤高の少女に妙な親近感を抱いた。

「よおっ」

思いきつて声をかけると、さつきは肩をビクッと震わせ、驚きの表情を向ける。

「ああ、びっくりした」

凜とした眼差し、スッと通った鼻梁、薄くも厚くもない唇。さらさらと流れるよう

なロングヘアと切れ長の目が、やはり大人っぽいイメージを印象づけた。

「タバコは身体によくないぞ。元気な赤ちゃんを産めなくなる」

竜平はにこやかな顔で、クールな美少女に近づいた。

「よけいなお世話だよ」

「少しそちに寄れよ」

「何よ。あんた、座る気？」

「いいから早く」

「ちよっ……」

強引に割りこめば、さつきはタバコの火を困惑げにもみ消した。

肩と肩、太腿の側面が触れ、少女の体温が伝わる。

心臓をドキリとさせながらも、竜平はおどけた顔つきで問いかけた。

「最近の調子はどうだ？」

「はあ？ いきなり何を言いだすの？ 向こうに行つてよ」

「そう邪険にするなよ。これでも、心配してんだからさ」

「自分のことを心配しなさいよ。聞いたよ、サッカー部を辞めたって」

「え？ 誰から聞いた？」

「滞だよ。二、三週間前だったかな。棧橋の前でばったりと会って、ちょっと立ち話をしたんだ」

「……そうか、そのときに聞いたんだ」

竜平がサッカー部を退部してから、すでに半年の期間が経過している。

狭い島なので、互いに顔を合わせないというわけにはいかなかったが、三人の美少女たちも以前のような深い交流はないようだ。

（みんな、それぞれ忙しいもんな。でも……ちよつと寂しいかも）

寂寥感に見舞われるも、竜平は努めて明るい表情を装った。

「いよいよ俺たちも三年だよな」

「……うん」

「あと一年で卒業なんて、月日が経つのは早いよな」

「竜平は……どうするの？」

「へ？」

「高校を卒業したあと。サッカー選手になるっていう夢、あきらめるの？」

痛いところを突かれ、言葉に詰まってしまう。

「こ、これから考えるよ、まだ若いんだし……。さつきだって、そうだろ？ 今は同

じ帰宅部同士なんだからさ」

皮肉めいたセリフを返せば、さつきはロングヘアを片手で掻きあげ、艶めいた視線を投げかけてきた。

瑞穂とは明らかに違う、コロンの甘やかな香りが鼻先に漂う。

思わず俯くと、ミニスカートから伸びた足が目を射貫いた。

三人の少女の中では身長がいちばん高く、すらりとした脚線美はモデルのようだ。キュッと締まった足首、適度に肉がついた太腿のなめらかさに、竜平は胸を妖しくざわつかせた。

「そうかあ、あと一年ちよつとしかないんだよね」

「う、うん」

「彼女はできたの？」

「へ？」

「何、驚いてんの？ 高校生なんだから、彼女の一人や二人いたって、別におかしくないでしょ？」

「それはそうだけど……」

「女とつき合ったこと、ないんだ？」

「バ、バカッ！ そんなわけないだろ」

これまた痛いところを突かれ、竜平は顔を真っ赤にして反論した。

「嘘ついたってだめだよ。彼女ができれば、すぐに耳に入ってくるはずだもん」

さつきの言うとおり、島民のあいだで隠し事は通用しない。

閉塞的な環境だけに、デートの現場を見られようものなら、噂はあっという間に広まってしまうのだ。

「ひょっとして、竜平って童貞？」

あけすけな質問に唖然とするも、竜平の驚きはこれだけにとどまらなかった。

「私が教えてあげようか？」

「なっ、なっ!!」

全身の血が沸騰し、心臓の鼓動がドラムロールのように響きだす。

さつきはしなを作り、さらに悩ましい顔つきで身を寄せてきた。

彼女の態度を見た限り、男性経験があるのは間違いないだろう。

不良男子生徒との不純異性交遊、そして援助交際は学校内で流れた噂だったが、火のないところに煙は立たないのか。

（さ、さつき……バージンじゃないんだ）

激しいショックを受けながらも、若い血潮は股間に猛々しい淫情を滾らせる。額に脂汗を滲ませた竜平は、目を伏せ、弱々しい口調で答えた。

「な、何言ってるんだよ。俺たち……友だちだろ？」

「友だち同士でエッチしちゃいけないって、誰が決めたの？」

「エ、エッチ!!」

この場で、童貞を捨てられるかもしれない。

あまりにも刺激的な誘いに、少年の顔は瞬時にして火照った。

さつきが目を細め、女豹のポーズでさらに身を近づける。

自分の意思とは無関係に、股間の肉槍は完全屹立を示していた。

3

ブリーフの中に押しこめられたペニスが、グングンと膨張しはじめる。

ジーンズの中心部は、今や物の見事に大きなテントを張っていた。

（し、鎮まれっ、鎮まれえええっ！）

心の叫びも虚しく、股間はますますこんもりと盛りあがっていく。

さつきは、早くも男の生理現象に気づいたようだ。

クスリと笑い、童貞少年をさらに追いつめるセリフを放った。

「意地を張ってないで、お姉さんに任せなよ。たっぷりと、気持ちのいい思いをさせてあげるから」

「お、お姉さんって、同じ年じゃないか」

「私のほうが竜平より大人なんだから、お姉さんでしょ？」

クールな顔立ちの少女は、そう言いながら竜平の太腿を手のひらで撫でさする。ただそれだけの行為で、背筋に甘美な電流が走り抜けた。

彼女は幼馴染みであり、大切な友だちでもあるのだ。

（ちゃ、ちゃんと拒否しないと……）

そう考えても、言葉が口から出ず、身体を少しも動かせない。

まるで蜘蛛の巣にかかった羽虫のようだった。

「エッチの前に、何をしてほしい？」

「いや、そ、それは……」

「おチンチン、手でしごいてあげようか？ それとも、おしゃぶりしてほしい？」

「ひっ、ひっ！」

少女の口から淫語が飛び出した瞬間、理性は瞬く間に忘却の彼方に吹き飛んだ。牡の性欲本能が覚醒し、頭の中が淫らな妄想一色に染まる。

（さ、さつきと……エッチができる!!）

今の竜平は、異様な昂奮に衝き動かされていた。

流麗な細眉に宝石のような瞳、謎めいた微笑。なんて大人びた容貌をしているのだろう。

絶世の美少女相手に、童貞を捨てられるかもしれないのだ。

期待に胸を震わせるなか、さつきの手がジーンズのホックを外し、ジッパーが引き下ろされる。

羞恥心が込みあげると同時に、竜平は腰を女の子のようにくねらせた。

「は、恥ずかしいよ」

「見せなきゃ、何も始まらないでしょ？ いいから腰を上げて」

催眠術にかかったように、言われるがまま腰を浮かせてしまう。

次の瞬間、ジーンズはブリーフとともに膝上まで引き下ろされた。

「あ、ああっ」

ペニスがジャックナイフのように飛び跳ね、透明な粘液が扇状に翻る。

驚いたことに、牡の肉はすでに先走りの液を溢れさせていたようだ。

包皮を被った亀頭は極限まで張りつめ、胴体にはミミズをのたくらせたような静脈が無数に浮きあがっていた。

若莖は鉄の棒と化し、もはや萎靡する気配は微塵もない。

ひんやりとした空気が股間を包みこみ、幼馴染み相手に恥部をさらけ出しているという事実をいやが上にも実感させられる。

美少女の視線が股間に注がれると、竜平は顔を耳たぶまで真っ赤に染めた。

「ふうん、竜平って包莖なんだ」

「よ、余計なお世話だ。それより、ず、ずるいぞ。人の恥ずかしいところを見たんだから、さつきのも見せろよ」

「見たいの？」

「そ、そりゃ見たいさ！」

女の子のあそこは、いったいどうなっているのか。

猛烈な好奇心が込みあげ、猛禽類のような目がスカートから伸びた太腿に向けられる。真横に座るさつきは、からかうように胸の膨らみを腕に押しつけた。

（や、柔らかい！）

決して巨乳というわけではないのだが、ふんわりとしたマシユマロのような感触に陶然としてしまう。

「ふうん、そんなに見たいんだ」

「み、見せろよ！」

童貞少年は、経験豊富な幼馴染みに押されっぱなし。逆襲とばかりに手をスカートに伸ばしたとたん、竜平は喉から絞りだすような声を発した。

「あ、あ、あああああつ」

さつきが艶やかな唇を窄め、ペニスの真上から唾液を滴らせたのである。

とろみがかった生温かい粘液が、亀頭から胴体をゆつくりと包みこんでいく。

（さ、さつきの唾がっ!!）

心臓が口から飛びでてきそうだった。

頭に血が昇りすぎ、今にもこめかみの血管が破裂しそうだった。

甘やかな唾液にコーティングされた肉筒が、木漏れ日を反射して、妖しい照り輝きを放つ。

「は、はああつ」

竜平は鼻息を荒らげ、早くも肩で喘いでいた。

脳みそは爆発寸前、このまま射精へのカウントダウンが始まってしまいそうだと。しなやかな指が近づいてくると、少年は目を見張った。

唾液を垂らされただけで、これだけの昂奮を喚起させたのである。下手をしたら、触られただけで放出してしまうかもしれない。

竜平は奥歯を噛みしめ、意識的に会陰を引き締めた。

「お、おふっ」

白い指先が肉筒に絡みつき、青筋がドクンと脈打つ。柔らかいふにふにとした感触に、竜平は天を仰いだ。

「あ、あああっ」

自分の指とは、感触がまったく違う。

ただ触れられているだけなのに、なぜこんなに気持ちがいいのだろう。

ペニスがビクビクと頭を振り、鈴割れからまたもや前触れの液がじわりと滲みだした。

（ああ、やばい。本当に……イッチャいそうだ）

ピストン運動が始まれば、おそらく五秒と保たないのではないか。

相手が処女ではないとはいえ、幼馴染みの女の子の前で無様な姿は晒したくない。

なんとか気を静めようとした直後、ペニスの先端に針を突き刺したかのような痛みが走った。

「あっ！」

「おチンチンの皮、ちゃんと剥いておかなきゃだめじゃない」

「ちよ、ちよっ……!!」

「ふふっ、私が大人のおチンチンにしてあげる」

「く、くおおおっ」

さつきは親指と人差し指を亀頭部に押しあて、強引に剥き下ろしていった。

「さて、どんな先っぽが出てくるのかな？」

「あう！ あう！」

完全脱皮まであともう一步というところで、ペニスが最大限に膨張しているせいか、包皮は雁首にとどまったまま下りてこない。

亀平は両足を一直線に伸ばし、ひたすら苦痛に耐えた。

おかげで射精感は消え失せたものの、包茎矯正の試練は予想以上につらい。

「ん……もうちよっつとで剥けそう」

「さ、さつき……いい、痛いよ」

「我慢して。私とエッチしたくないの？」

もちろん、童貞喪失のチャンスは逃したくなかった。

幼馴染みとはいえ、相手は類い希なる美少女なのである。

今の竜平は見栄や外聞をかなぐり捨て、まさに一匹の性獣と化していた。

（我慢だ……我慢しろ！）

疼痛からペニスが萎みはじめ、同時に包皮が肉傘の上でくると反転する。

「ほら、剥けたよ。見てごらん」

「あ、ああ」

涙目で見下ろせば、赤い亀頭冠が余すことなくさらけ出されている。

先端部に走る奇妙な違和感に、竜平は小さな溜め息をついた。

「ふふっ。おチンチン、ひくひくしてる。痛くない？」

「う、うん……ちよつと変な感じだけど」

「慣れれば、何も感じなくなるよ。ずっと剥いておくんだからね」

さつきは、男の身体の構造もしっかりと把握している。

性体験が豊富でなければ、とても言えないセリフだ。

他の男にも、包茎矯正などしたのだろうか。

（つまり、過去にも筆下ろしをした経験があるっていうことだ。いったい、何人の男とエッチしたんだよお）

軽いショックを受けながらも、柔らかい指腹が再び肉幹に絡まると、竜平は目をひんむいた。

「あ、あああああつ！」

指の抽送が始まり、背筋を熱い火柱が駆け抜ける。

萎えかけていたペニスに、みるみる強靱な芯が入っていった。

4

指の隙間にすべり込んだ唾液が、ニッチャニッチャと淫猥な音を奏でる。

リズムカルな律動が、ペニスに多大な快感を吹きこむ。

童貞少年は腰をくねらせ、心臓の鼓動を一気に跳ねあがらせた。

幼馴染みの美少女が、自分の恥部を玩弄している。

（あ、ああつ、さ、さつきが俺のチンポを!!）

ひよつとして、夢を見ているのではないか。

いまだに現実のこととしてとらえられず、竜平は口を半開きにしたまま、惚けた表情で股間を見つめていた。

さつきは指腹を肉胴に往復させながら、上目遣いで様子を探ってくる。

羞恥と快感が交錯し、えも言われぬ愉悅が全身を苛んだ。

「あ、あぁっ、は、恥ずかしいよ。こっちを見るな」

「ふふっ。だって竜平の顔、すごくエッチなんだもん。私、男の子の切なそうな表情を見るのが好きなんだ」

少女はそう言いながら、陰囊を手のひらで優しくさすりあげる。

「あ、あふっ！」

下腹部が浮遊感に包まれ、天にも昇るような快美が腰の奥から迫りあがった。

ふだんならこの時点で射精していたのだろうが、包皮を剥かれたばかりの違和感が射精感にからうじてストッパーをかけている。

それでも昂奮のボルテージは天井知らずに上昇し、牡のマグマは深奥部で怒濤のように荒れ狂った。

「竜平」

「な……何だよ」

「すぐにイッちゃうかと思ったけど、けっこうがんばるんだね」

「よ……余計なお世話だ。そ、そんなことより、お前、いったい何人の男と経験してるんだ？」

「何人だと思う？」

「五人？ 十人？ まさか、百人斬りなんてしてないよな？」

「ふふっ、ご想像にお任せするわ」

生意気な幼馴染みに、なんとかして一矢を報いたい。

胸の膨らみを揉みしだこうか、それともスカートの奥に手をつこんでやろうか。

あらゆる反撃手段を思い浮かべたものの、全身の筋肉が強ばり、手はピクリとも動かなかった。

（だ、だめだ。悔しいけど、どうにも……ならない）

包皮が亀頭を締めつけ、雁首がじんじんと疼く。

「あ、ううっ」

思わず口元を歪めたとたん、さつきはまたもや真上から大量の唾液を滴らせた。鬱血しはじめた頭頂部が、生温かい透明液に覆い尽くされていく。

ペニスが派手にしなった瞬間、さつきは冷ややかな笑みを浮かべた。

「いいわ。お口でしてあげる」

「え？ あつ、おふううつ！」

艶々とした赤い唇が、張りつめた亀頭にチュッと吸いつく。

ヌルリとした、これまた生温かい感触に、竜平は熱い吐息を放った。

（あ、あ、あ……さ、さつきの唇が）

美少女は先端を口を含み、ソフトクリームを舐めるように、舌先を上下左右にくねらせる。

ぬめぬめの唾液と熱い粘膜が絡みつき、脳天を快楽の稲妻が貫いた。

（な、何だよ、これ。フェラチオって、こんなに気持ちがいいんだ）

しつぽりと濡れた口腔が、ペニス全体に吸いつくように絡みつく。

牡器官を咥えこんだ美少女の横顔が、多大な昂奮を促す。

さつきが肉筒をゆっくり吞みこんでいくと、蕩けるような感覚が股間全体を包みこんだ。

フェラチオで、これだけの快美を与えてくれるのだ。

ペニスを膣の中に挿入したら、本当に溶けてしまうのではないか。

性欲にさらなる火がつき、童貞喪失に向けて期待感に拍車がかかる。

（ああ、や、やりたい！ セックスしたいよお）

初体験に並々ならぬ思いを馳せた直後、怒張はみるみる少女の口の中に沈みこんでいった。

「はひっ」

口中でクチュクポッと唾液が跳ね、上下の唇が肉胴の上をすべり落ちていく。

「ン……うふっ」

さつきは鼻からくぐもった吐息を放ち、ついに勃起を根元まで咥えこんだ。

（あ、あ、熱い。口の中がとろとろだあ）

喉で締めつけているのか、亀頭全体に揉みこまれるような感触が走る。

さつきは首を左右に小さく振ったあと、顔をゆったりと引きあげていった。

捲れあがった唇がまたもや胴体をこすりあげ、ねとついた唾液がペニスを妖しく濡らす。

美少女はフェラチオ経験も豊富なのか、舌先を左右に泳がせ、裏筋や縫い目に刺激を与えたあと、本格的な抽送で少年の性感をあありたてていった。

「ンっ！ ふっ！ ンふっ！」

小気味のいい息継ぎとともに、顔が上下に打ち振られる。

頬がペコンとへこみ、バキュームのような吸引力で肉棹が引き絞られる。

ちゅぷちゅぷと、淫らな吸茎音が鳴り響くたびに、射精感揺るぎのない上昇カーブを描き、竜平の顔つきはますます苦悶に歪んでいった。

「あつ、うつ、くつ、おおつ」

熱感が腰を走り抜け、意識せずとも呻き声が洩れてしまう。

牡の証はすでに射出口をノックしていたが、ここで放出するわけにはいかない。

幼馴染みに滑稽な姿は見せられないという意地と、それ以上にセックスを体験したいという気持ちのほうに圧倒的に強かった。

（何としても、さつきとエッチを……あ、ふうううつ！）

暴風雨のような悦楽が股間を突きあげ、竜平は鬼のような形相で臀部の筋肉を引き攣らせた。

さつきが顔をスライドさせながら、指で肉幹をしごきたててきたのである。

手首のスナップをきかせ、軽やかなリズムで肉棒が撚られる。

剛直の上半分は濡れた舌と唇で舐めしゃぶられ、下半分は指での刺激を受けているのだからたまらない。

「あ、ふうううつ！」



少年の決意はもろくも破れ、灼熱の溶岩流は出口に向かって一斉になだれ込んだ。丹田に力を込めても、何の役にも立たない。

竜平は目をカッと見開き、我慢の限界を金切り声で訴えた。

「さ、さつき！　で、出ちゃう！　そんなに激しくしたら出ちゃうよ……あ、ぐうううううつ!!」

必死の懇願虚しく、さつきはフェラチオを中断するどころか、さらに顔と手の動きを速める。

ペニスは今や、口唇から溢れでた唾液でどろどろの状態だ。

「そ、そんなっ!!　あ、あああああつ!!」

彼女は最初から、セックスなどする気はなかったのだろうか。

このままでは、間違いなく口内に射精してしまう。

狂おしげな表情で悶絶するなか、脳裏で白い火花が飛び散り、快楽の高波が怒濤のように打ち寄せた。

「あつ、あつ、あつ、イクつ、イキそう」

青筋が脈動した瞬間、さつきがようやく口からペニスを引き抜く。そして舌なめずりをし、手で捌り倒すようにペニスをこすりあげた。

顔をくしゃくしゃにした少年とは対照的に、少女はきらめく瞳を尿道口に向ける。先走りの汁が噴きあがり、亀頭の先端が水飴を塗りたくったかのようにぬめり返る。バラ色の恍惚が全身を染めあげたとたん、竜平は黒目をひっくり返し、下肢を小刻みに痙攣させた。

「イクっ、イクっ……イクうううううっ!!」

尿管をひた走るザーメンは、包皮で締めつけられた雁首でいったんとどまり、反動をつけてから射出する。

「きやあああっ!」

びゅるんと跳ね飛んだ白濁は、宙で不思議な模様を描き、ロングヘアのサイドにべったりと張りついた。

経験豊富な美少女も、これほどの飛距離で放出されるとは予測できなかったのだろう。慌ててペニスを逆方向に振ったと同時に、二発、三発、四発と、青臭い樹液が白い尾を引きながら放たれていった。

「いやっ、すっごい!」

さつきは一瞬眉を顰めたものの、逞しい射精に驚嘆したようで、ほくそ笑みながら肉胴を手のひらで絞りあげる。

まさに、ペニスを折らんばかりの猛烈な手コキだ。

「あ、あ……あああつ」

合計六回の放出のあと、竜平は階段からずり落ちるように倒れこんだ。

「ちよつと……こんなにたくさん出す男いないよ。どんだけ溜めこんでたの？」

頭の中が朦朧とし、美少女の問いかけが耳に届かない。

柔らかい指先が根元から雁首に向かって撫でられると、尿管内の残滓がピュッと、ひと際高く跳ね飛んだ。

「やんっ……まだ出る」

さつきがうれしそうに呟くなか、竜平は百メートルを全速力で走った直後のように喘いでいた。

「はあはあはあ、はああああつ」

心臓が暴れまくり、荒い息がまったく止まらない。

下腹部を露出させたままの姿は何とも格好悪かったが、快楽の余韻が身体の隅々まで行き渡り、思考回路は完全にショートしている。

さつきはすつくと立ちあがり、ジャンパーのポケットからティッシュを取り出すと、髪と手に付着した汚液を拭い取った。

「大丈夫？」

「あ……ああ」

ようやく息が整いはじめるも、まだ頭がボーッとしている。

クスリと笑った美少女は、ティッシュをザーメンだらけの股間に放り投げ、階段から土の上に下り立った。

「それじゃ私、家に帰るからね」

「え……え？」

とたんに頭が回りだし、慌てて身を起こす。

童貞喪失に多大なる期待を抱いていただけに、竜平は泣きそうな表情で口を開いた。

「あ、エ、エッチは？」

「こんな状態じゃ、もうできないでしょ？ 髪の毛だって、ザーメン臭いし」

全身が火照っていて気づかなかつたが、我に返ると、下腹部にへばりついた精液が冷え、凄まじい不快感が生じはじめる。

確かに神社の裏でセックスをするには無理があつたが、竜平は未練たっぷり言い返した。

「ず、ずるいぞ。純情な少年を、さんざんもてあそんで」

「何が純情よ。汚いの、人の髪に引っかけておいて」

キッと睨みつけてくる眼差しが、心の奥を甘く引っ搔く。

再び性欲のほむらが燃えあがった瞬間、さつきは身体をくるりと反転させた。

「お、おい……ホントに帰っちゃうのかよ？」

「今週……」

「え？」

「三学期の終業式があるでしょ？」

「あ、ああ。水曜日だよな」

「終業式が終わったら、私の家に来て。その日、父さんはいないから」

さつきは肩越しから告げ、ジャンパーのポケットに手をつこみながら歩きだす。

（さ、さつきの家？ そのときにエッチをさせてくれるのか？）

少女は手コキとフェラチオで、射精まで導いてくれた。

期待するなど言うほうが無理な話だろう。

再び高揚感に打ち震えた竜平のペニスは、放出したばかりにもかかわらず、いまだに完全勃起を維持しつづけていた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>